



(奈良)

が水田である。調査の結果、全長八〇m、幅約六〜一〇m、深さ一・〇〜一・五m程を測る南北溝を検出した。溝の南端部には、大小の角礫を配して湧水点が作られる。ここから湧き出た水は溝内に導かれ、石組・木樋などを経て溝下方へと排

奈良・阪原阪戸遺跡

所在地 奈良市阪原町

調査期間 一九九二年(平4)十一月〜一九九三年二月

発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

調査担当者 木下 亘・平岩欣太

遺跡の種類 祭祀遺跡

遺跡の年代 五世紀〜八世紀

遺跡及び木簡出土遺構の概要

阪原阪戸遺跡は、奈良市の東側山間部に位置し、木津川支流の白砂川中流域に位置する。調査地は北向きの斜面地で、現在その多く

出される構造をとる。木樋出口以下、溝内からは多量の遺物とともに配石・石組などが検出された。木簡は溝内の堆積土の中層から出土した。伴出した遺物には須恵器・土師器などの土器類のほか、木製品・石製模造品などがあり、五世紀前半〜奈良時代までのものが含まれている。

8 木簡の积文・内容

(1) □□夫子之求之與其諸異乎

(253)×21×7 081

上端・下端とも折損している。中央部分は厚みがあるが、上部・下部とも四分の一ほどがやや薄くなっており、そのため現状ではやや弓なりに曲がっている。木簡は、『論語』学而篇の左の段の後半部を習書したものである。

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與、子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之與、

(金谷治訳注『論語』 岩波文庫)

右に掲げた原文は、明経博士清原家の定本に基づき、それを唐の開成石経と対校したものであるが、「夫子之求之也」は木簡では「夫子之求之與」となっていて異なる。また夫子の上二文字は墨痕が薄く釈読できないが「得之」ではない。上端部から墨痕のみえる部分までは、赤外線テレビにより、全く墨痕のないことを確認している。木簡のほかに、同じ層位から墨書土器と須恵器片を転用した硯が

出土している。墨書は高杯の外側面にあり、「俾」^{〔俾カ〕}と読める。

「俾」は卑に通じる。「顆」(果)は万葉仮名にはないが、数量の単位に用いる助数詞として、清瓜二十果、醬瓜十四果の例がある。「ヒチシ」□「ヒッシ」□と読めるが、「櫃」□の意か。硯には全面にわたって墨痕があり、わずかに「志」「直」「牛」などの文字を読みとれたにすぎない。

阪原阪戸遺跡では、五世紀前半から奈良時代に至るまで継続して祭祀が行なわれた水源遺構が検出された。三重県上野市の城ノ越遺跡などととも、水源祭祀遺構として稀有の価値をもつ。その溝中の堆積土の中層から、飛鳥・奈良時代の多量の土師器・須恵器、数多くの木製品(斎串を含む)などが出土し、右の木簡・墨書土器・硯が含まれていた。木簡・墨書土器・硯の出土は、水源祭祀遺構に近接して奈良時代には官衙的施設の存在したことを示している。

学令によれば、大学・国学で学ぶ全ての学生は、『論語』と『孝経』を学ぶことが必須とされた。『論語』の習書木簡は、そうした学生から出身して官人となった人物が阪原阪戸遺跡の近傍にいたことを示している。墨書土器や硯の出土も、それを裏付けている。

阪原阪戸遺跡は、奈良市の中心部から直接距離にして約一〇kmほど離れた東の山中に所在する。奈良時代には、平城遷都直後の和銅四年正月に木津川沿いが東海道となったが、添上郡柳生郷の阪原阪戸遺跡の場所から、布目川沿いをたどり、伊賀国府に至って東海道

に合流する捷路を想定できる。五世紀前半以来、水源祭祀が行なわれてきた地に、官衙的な施設が設けられたと推定することも可能だろう。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所「阪原阪戸遺跡(阪原遺跡群第二次)発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報 一九九三年度 一九九四年』)

同附属博物館『大和を掘るXIII—一九九二年度発掘調査速報展—』(一九九三年)



(1) 7・9 木下 亘・平岩欣太
(8) 和 田 幸